大分県きのこ研究指導センター情報誌

くらんぷ

第31号（平成16年6月）

クヌギ原木を利用したマイタケ（詳細は本文に）

目　次

●声
・就任あいさつ……1
農林水産部長　渡邉 節男

●研究報告
・クヌギ原木を利用した
マイタケ栽培に関する研究……2
・実用化検定シイタケ試験品種の紹介……3

●普及指導報告
・初心者のための原木しいたけ栽培研修会…4

●シリーズ
・きのこ生産現場から……5
― 駒打ち補助器具「コマスケ君」活躍 ―

●インフォメーション
平成16年度試験研究課題の概要……6
人物紹介……7

就任あいさつ

農林水産部長　渡邉 節男

農業と林業、水産振興が一つの部で統一的に取り組まれることとなり、４月１日から農林水産部が誕生しました。農政部長からの横異動で就任致しましたが、農政の分野だけでも課題山積ですから、林業、水産業の難しさを考えますと、本当に身の引き締まる思いです。ただ、県の仕事の中でも第一次産業の振興を預かる分野には、他にはない専門技術を持った職員が多く配置されていますので、この力が発揮できる環境づくりさえ整えば、どんな難問でも解決できないことはないと思ってます。予算は限界があり、人員も同じですが、人知は無限です。「この世で起きたことで、この世で解決できないわけはない」の精神でねばり強くとり組む決意です。

ところで永年林業振興に携わった方から、40年前の自分の初任給が杉材１立方メートル価格と同じだったのに、今の木材価格は当時と変わってない、というのを聞いて、これは卵と同じだと思いました。今回「鳥インフルエンザ」の発生で、報道を通じて養鶏農家の方々の経営が本当に大変だということを改めて県民の皆さんが認識していただいたことと思いますが、日本の高度成長とともに一定の上昇を続けてきた物価の流れに、木材と卵の価格は取り残されるかのように推移してきたことになります。

一次産業に共通しているのは、「まさに危機的状況」というような形で表現されることです。確かに、厳しい現状にあることは事実ですが、それを言ったから問題解決になるわけではありません。

「キューバ危機」に直面したアメリカの話ですが、当時ケネディ大統領は国民に訴える演説で日本の言葉を援用し、『「危機」は英語ではcrisisですが、日本語の危機という言葉には「危険」（dangar）という意味と「機会」（chance）という意味がある。キューバは確かにアメリカにとっては危険な問題だが国民の心を一つにすれば乗り越えられる好機＝チャンスでもある』と訴え、アメリカ国民の支持を得たという話を聞いたことがあります。危機とはそのような状況で使われてこそ、それを乗り切る体制もできるのかも知れません。つくづく言葉は重いものだと思います。

一次産業は地域構成産業といわれておりますが、我が国では長年この分野には企業の参入を制限してきたこともあり、まだまだ研究、開発の余地が沢山あり、可能性の宝庫とも言えます。最近、異業種からの新規参入者も徐々に出てきました。これまで人に使える立場だった人達が、自分でリスクを負って自己責任のもとで頑張ってる様子をみるにつけ、農山漁村の将来に希望を託せる思いがしてなりません。

先月、農林水産物の中でも大分の代名詞のように言われてきました本県特産椎茸の栽培現地を見せてもらう機会がありました。ミカンや梨と違って、通りから眺められるものではなく、栽培現場は予想以上に厳しい山間地の奥まったところでした。

生産者のご夫婦が手塩にかけて産み出した椎茸は、職人さんの心意気を感じさせるまさに芸術品です。できあがるまでの苦労や汗、思いが込められているからでしょう。

第一次産業はその地域の文化を現していると言われる所以も分かる気がします。

そんな方々の苦労や汗に報いる役割を我々は担っているという自負心でこれからとも頑張る決意です。どうぞ、よろしくお願いします。

クヌギ原木を利用したマイタケ栽培に関する研究

マイタケは山奥のミズナラの老大木の根際に発生する大変美味なきのこです。九州ではなじみが薄かったのですが、近年、大分のスーパーでも年中見受けられるようになりました。しかし、市販品はオガクズで栽培されるため肉質が軟弱で、香りが薄く、野生のマイタケには遠く及びません。

当センターでは、昨年度からクヌギを利用したマイタケの原木栽培研究に本格的に取り組んでいます。研究用には使えないクヌギの元玉を15cm程度に玉切りし、太すぎる原木は割ってから袋に入れ殺菌します。これにマイタケの種菌を接種し、４ヶ月ほど培養します。お盆前後に袋から取り出し、森の中と同じように木漏れ日が差すような環境条件を作った土中に伏せ込みます。

10月になり、夜露が降りる頃になると、味や香り、食感など本物と遜色のないマイタケが発生してきます。発生は５年ほど続きますが、発生期間が秋の一時期に集中してしまうのがネックです。そこで、この短い発生期間を拡張させるための栽培方法の開発や品種の組み合わせの検討を行っています。

1.試験の概要

（１）早期に発生させるための栽培方法の検討

マイタケ子実体発生には地温の低下が大きな刺激となると考えられます。そこで、氷を施し、地温を調整することで、早期に発生させることを試みました。品種は当センター保存菌株OMC-6025を使用し、９月１日から20日まで、埋め込み地表全面に氷を撒き、子実体の発生時期を調査しました。

（２）品種による原木適応調査

当センターマイタケ保存菌株43種（OMC-6001～6043）について菌床を調製し、120日間培養後、コンテナに埋設して 気温15℃、湿度85％の発生室で発生操作を行い、各品種の原木適応性を調査しました。

2.試験結果

（１）早期に発生させるための栽培方法の検討

対照区（無処理区）での発生のピークは10/７～10/10であったのに対し、氷処理区では９/30～10/３となり、発生時期が一週間早期化されました。この結果により、地温を調節することで、子実体の発生時期を調節できるであろうことが予想されました。

（２）品種による原木適応調査

当センターマイタケ保存菌株43種について室内での発生操作を行ったところ、OMC-6004, 6012, 6013, 6025, 6028, 6035, 6036, 6043の８系統において子実体の発生が観察されました。また、それらの品種の野外埋設試験では、収量性において大きく差があり、品種による発生時期のばらつきも見られました。このことは栽培する品種の組み合わせによっては、発生時期の分散を図ることが可能であることを示しています。

今年度は発生時期を遅らせる栽培技術の検討を行うとともに、品種の検索をさらに進め、各品種の早晩性を明らかにしていきます。

（研究部　石原宏基）

実用化検定シイタケ試験品種の紹介

平成10年度からシイタケ新品種の実用化検定試験を生産者の多大なご協力のもとに実施しています。これまでの試験結果で、品質や収量で評価の高かった品種がみられましたので、それらの品種の概要を紹介します。

（1）Lec-023

系統区分：中温性

発 生 型：秋春分散発生型

品柄傾向：香茹向き

特　　徴：肉厚でがっちりした形、足は太いが傘との付け根は細く乾燥の仕上がりには問題ない。発生パターンは、森の290号と同様の傾向を示します。

（2）91-0952

系統区分：中温性

発 生 型：秋春連続発生型

品柄傾向：香信向き

特　　徴：肉厚はやや薄いが、縁の巻き込みがしっかりしてバレにくい。国東地域の栽培試験で、1年次で1代分に相当する収量が得られた。発生パターンは、菌興の115号と同様の傾向を示します。

（研究部　石井秀之）

「初心者のための原木しいたけ栽培研修会」開催

■ 研修会の趣旨

大分県の椎茸栽培は、三百年余の長い歴史を持ち、本県を代表する特産品となっています。しかしながら近年、農山村の過疎化等により生産者の減少、高齢化が進み、原木椎茸の安定生産が危ぶまれています。このため、県内の豊富なクヌギを活用した「原木しいたけ栽培者」の育成・確保と新規参入の促進を目的として研修会を開催しました。

■ 即実践できる研修内容

原木椎茸の栽培方法や経営に関する基礎的な内容で、センターの研究員や専門技術員が講師となり、３回の講義や実技の研修を行いました。

・第１回（１月）
　椎茸栽培の実際や品種の特性、乾燥技術、病虫害の種類、経営のノウハウなどの講義

・第２回（２月）
　原木の玉切り、種駒の植菌、伏せ込み作業などの実習

・第３回（３月）
　椎茸の採取・乾燥の実習、生産現場の視察研修、椎茸を使った創作料理の試食等

メモをとりながら真剣に話しを聞く参加者

■ 予想を超えた応募者

大分県内において、原木を活用した「椎茸栽培」を始めようとする人を対象に広く受講生を募集しました。研修を計画した当初はどれくらいの応募があるのか心配されましたが、結果的には40名を超える応募者があり、締め切り後の問い合わせも多数寄せられ、椎茸栽培への関心の高さに意を強くしました。

■ 期待される研修参加者

今回の研修会には、椎茸生産者の後継者（20才代）はもとより、定年退職後に椎茸生産を始める人や椎茸の流通（販売）に携わる人、建設関係等異業種の人など様々な人の参加がありました。皆さんとても意欲的でやる気があり、これからが大いに期待されます。

原木の玉切り実習

（研修参加者の感想）

・研修は大変勉強になり、何をするにも基本が大事だと思いました。
・各市町村でもこうした研修会を実施してもらいたい。
・椎茸栽培は農林業振興の柱になるものと考えています。将来は法人格として、雇用の創出に繋げたい。
・これから経験を積んで技術が身に付いたら大規模な生産を考えている。
・生産から販売までを一貫して行い消費者の信頼を得たい。

椎茸創作料理の試食

■ 今後の研修計画

今回の研修が好評だったことから、本年度も引き続き研修会の開催を予定しています。今年はさらに内容を充実し、秋からの研修開始を目途に研修生を募集します。沢山の応募を待っています。　（指導部　宿利角丸）

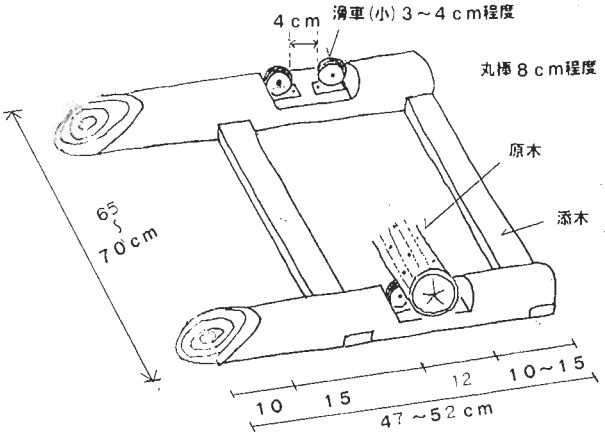
＜きのこ生産現場から＞

ー駒打ち助っ人「コマスケ君」活躍ー

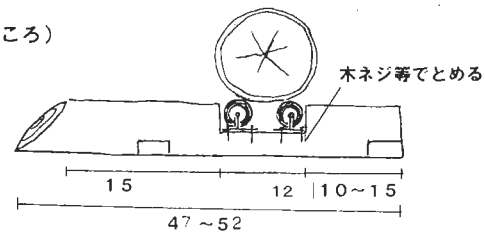
大野地方振興局林業課の林業改良指導員が、椎茸の駒打ち作業を楽にする補助器具「コマスケ君」を考案しました。大野管内の若手林業改良指導員は毎年駒打ちのシーズンになると生産者を訪ね、巡回指導も兼ねて現場作業を体験します。大きな原木に駒を打つ作業は大変です。特に、原木を回して駒を打つのに苦労します。

「もーちーっと楽にならんのかな！」そんな体験の中から生まれたのが「コマスケ君」です。議論百出、試行錯誤しやっと生まれた「コマスケ君」。生産者にも実際に使ってもらい大変重宝がられています。

みなさんも是非使って見てください。改良点などのアイディアを待ってます。

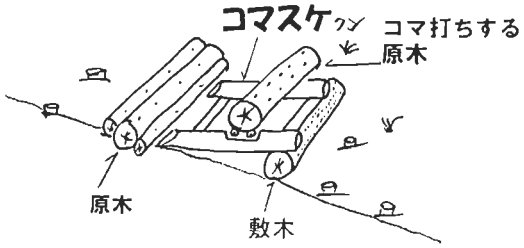


（横から見たところ）



＜設計図＞

・斜面にあわせて木などを下に敷いて
水平になるように使ってください！



＜山での使い方＞

木を敷いて水平にする

原木が軽く回ります

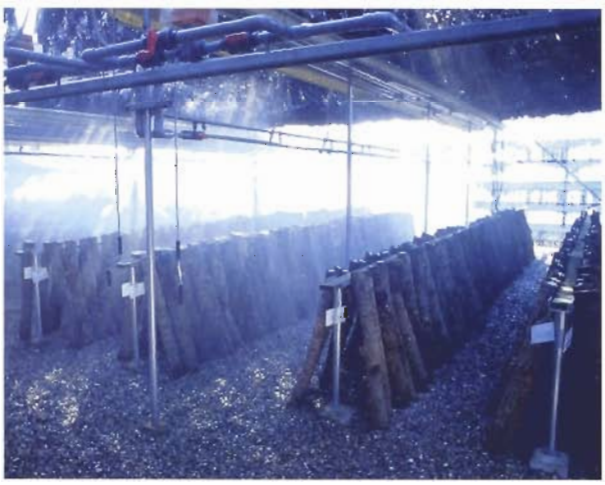
問合せ先　大野地方振興局林業課（担当　森迫）
TEL　0974-22-0141
FAX　0974-22-7075

平成16年度試験研究課題の概要

当センターの16年度の課題は12課題ですが、主な研究の概要について紹介します。

1．暖冬下の乾シイタケ安定生産技術の開発

平成11年度から研究を継続していますが、本年度は低温性・中温性品種の抑制条件と散水条件の関係を明らかにし、これまでの試験結果をまとめます。



人工ほだ場における散水状況

2．分散発生型乾シイタケ優良品種の作出

乾シイタケの新品種開発はこれまで主として低温性のものに取り組んできましたが、これからは分散発生が可能な中温性品種の開発を目指します。

開発中の分散発生型の新品種

3．新品種の実用化検定

平成10年度から20の乾シイタケ用新品種を県内生産者に委託栽培していますが、そのうち2品種について高い評価を得ました。そこで本年度から栽培区域を広げるため県椎茸農協他9名の生産者に委託してこの2品種の再試験をすることにしました。

4．きのこの病害虫の予防・防除

シイタケオオヒロズコガやシイタケ腐敗病の防除法・シイタケトンボキノコバエ等の生活史の解明・ハラアカコブカミキリの微生物防除の検討を行います。

シイタケオオヒロズコガによる食害の状況

5．クヌギ原木を利用したマイタケ栽培

昨年度から取り組んでいますが、今年度は発生時期を遅らせる栽培技術の開発や早晩性品種の検索に取り組みます。

6．乾シイタケの原産国判別

戻した時の膨張度合いや戻し汁の色素の違い等による簡易で精度の高い大分産と外国産の判別手法の開発を行います。

（研究部　長野清）

人物紹介

所　長

高橋　　巌（59歳）
本匠村出身

鍾乳洞で有名な本匠村小半（おながら）地区の出身である。昭和42年東京農大を卒業後、三重事務所（現大野振興局）を振り出しに、なんと16回も転勤したという貴重な体験の持ち主。これまで勤務の大半は専技を中心とした普及畑を歩んできた。きのこに関してはしいたけ特林係長、センター指導部長を経験し、センターの長として再び返り咲いた。趣味は書道・麻雀とのことであるが、特に書道ははなはだ非凡で職場の書き物はすべておまかせといったところ。幅広い人脈、明るい性格等から前回ホンシメジ（ダイコクシメジ）の名がついたが今回も引き継ぐとしよう。

指導部長

川野　洋一郎（56才）
安岐町出身

宮崎大学を卒業後昭和46年に県職員となる。林業試験場に16年間勤務した後行政へ。国東事務所で初めてのＡＧとして勤務し、森林保全課では狩猟行政を経験。その後いくつかの振興局を経て林業振興課で担い手対策を担当し、林業の直面する課題に果敢に取り組んだ。前任は中津下毛地方振興局の林業水産課長。独身時代に、クヌギの株に生えたクリタケを恐る恐る食べたのがきのことの始めての出会い。実直で物静かな語り口調は林業職員一番の紳士？　と言われている。

きのこに例えれば、「仏の里国東」で修行を積んだ「ヤマブシタケ」か。

研究部主任研究員

山下　和久（37歳）
大分市出身

日本大学を卒業後平成２年に県職員となる。林政課を皮切りに大野、佐伯、大分振興局に勤務し、今回、林業振興課しいたけ特林係から乾シイタケの原産国偽装表示を撲滅すべく、本人のたっての希望で当センターに赴任となった期待の新人。貴公子然とした容姿とは裏腹に、乾シイタケ原産国判別法の開発に並々ならぬ熱意を燃やしており、不正業者にとっては恐怖の的になることは間違いない。趣味は仕事のあとのバドミントンで大量の汗を流すこととか。

きのこに例えると、当センターに新風を巻き起こす「バイリングー」といったところか。

第47回大分県乾椎茸品評会（箱物の部 香信）
最優秀賞　首藤　岩光 氏

編集・発行　大分県きのこ研究指導センター
〒879-7111　大分県大野郡三重町大字赤嶺2369
TEL 0974(22)4236・4285　FAX 0974(22)6850
http://www.pref.oita.jp/16103/index.html
印　　刷　佐伯印刷株式会社

発行日　平成16年6月